

大  
成  
省

地方物産調査第三報

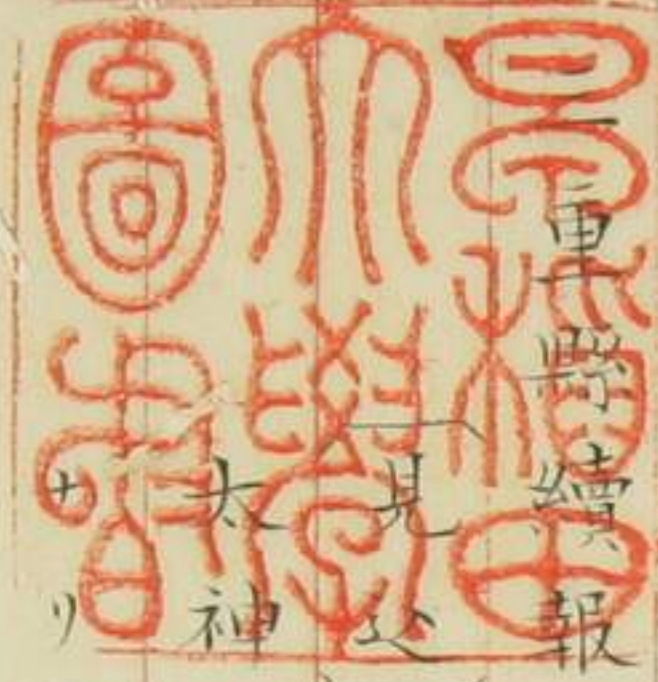
滋賀縣

三重縣續報

寫了  
校正



114  
A 3879  
3



大正十一年四月  
大隈侯爵邸寄贈

日本農事ノ整備セシ原由ヲ考案スルニ伊勢  
 宮ハ大ニ之ヲ裨補開進セシメタルノ一原由  
 夫レ從前藩治ノ際ニ當リ各人民ハ容易ニ其  
 國境ヲ出テサリシ然レモ伊勢ノ皇廟并ニ讚岐ノ  
 金毘羅ハ人民遠ク參詣スル者甚ク多ク就中農事  
 ニ注意シ黽勉思考スル者ハ沿道耕耘ノ景況及ヒ  
 運輸ノ便否ヲ目撃シ各其自國ニ歸リテ斟酌施用  
 スルヲ得タルヲ以テ各邦割據ノ時ト雖モ其農事  
 ノ大不同ナカリシナルヘシ大厩ヘハ目今毎年參  
 詣ノ人仮令僅少ナルモ百二十萬人ニ下ラスト云  
 フ顧テニ此人タルヤ以來漸々年ヲ逐テ減スヘシ  
 然レモ斯ル集參ノ繁盛ハ如何様トモシテ成ルヘ

ク減セサルトニ謀リタキモノナリ乍併此法ヤ固  
ヨリ神徳ヲ示スヘキハ勿論ナレ氏其他ヲ擇ハス  
實際職業上ニ有益ノトヲ設ケスンハアルモカラ  
ス  
第一日本全國ノ博覽會ヲ此地ニ設ケタシ日本全  
國ノ珍器古物ヲ集メ諸縣ヨリモ重ニ勸農試驗圃  
ヲ茲ニ設ケタシ縣々ヨリ豪農ノ子弟ヲ此地ニ集  
ル仕方アルヲ要ス此土地ハ先ツ歐羅巴洲羅馬ノ  
如キ神聖ノ地ナレハ人ヲ強迫セストモ自然ト集  
合ニ適シタル所ナリ故ニ又職工諸般ノ業トモ成  
丈此地ニ設置シタシ而シテ職工場へ修行ノ為メ  
入學スル者ハ年月ヲ期セス精々輕便ニシテ該職  
業ノ出来ル様ニ取計ヲヘシ仮令ハ甲年父ニ從テ

來學セシ子弟輩ハ乙年其隣翁ノ來參マテ留學シ  
其隣翁ト、モニ歸國スルヲ得ヘキ仕方等ナリ又  
伊勢ハ飛脚船到着ノ便ナキ様ニアリタシ是レ甚  
タ頑固ノ論ト解了スル人アルヘケレ氏決シテ否  
ラス如何トナレハ日本各地ノ農人其陸行シテ得  
ル所ノ心目智識ノ利勝テ數フヘカラサルカ故ナ  
リ又タ之ヲ誘導スルノ政策モ茲ニ出サルヘカラ  
サルナリ  
伊勢ノ地面ニ付キ農事ヲ一般ニ強迫指令スル  
ハ實ニ為ス能ハサルト云フヘシ故ニ街道中一  
ニケ所咽喉ノ地アレハ其地ニ農事試驗場ヲ設ケ  
タシ即チ明野ノ荒地凡六百町歩ノ内二百町ハ直  
ニ着手スルヲ得ヘキ所ナリ其地價タルヤ尙友ニ

付垂田乃至垂田半ナリト云フ此地ハ全ク平坦ニ  
シテ氣候ハ勿論水利其外一切農事ニ不足ナキ所  
ナリト併是迄諸方ニ從事セル開拓地試験圃ノ如  
キモノニテハ決シテ行届クテ能ハサルヲ信ス  
該試験場ニ下種スヘキモノ第一ニハ米菜種ナリ  
米ハ亦謂伊勢米ノ美質ヨリモ今一層ニ其質美ニ  
シテ且ツ其産額巨多ナル仕方ヲ表示セサルヘカ  
ラス即チ入費ヲ省キ所得ヲ充分ニスル方法ナリ  
該田地ノ試験場ニ於テハ水渠ノ深サ目今田地深  
サ凡寺尺五寸ノモノヨリモ三倍即チ四尺五寸ノ  
深サニ為サハルヘカラス是レ水渠ノ深キハ水利  
ノ為ニ不便ナリト了解スヘケレ氏決シテ然ルモ  
ノニ非ス第一米ノ産額タル伊國ノ法ニ據ルトキ

ハ目今收穫ノ二倍ヲ得ヘク且其質ヲ美ニスルヲ  
得ヘシ其上多少ノ工程時間ヲ減省スルヲ得ル故  
即チ尙反地ノ産額ハ三反ノ産額ニ至ルヘカラサ  
ルノ理由ヲシト信セリ  
又田地ノ産額目今ノ所ニテハ十分ノ五ニ至ラス  
即チ麥菜種ノ産額ハ十分ノ二ナリ  
又タ右十分ニ中第二ノ働(即チ麥作菜種ノ耕作)ナ  
キ所ハ此十分ニ中唯ニ其一分ノミニノ働キニ過キ  
サルナリ  
現今田地ノ産額ハ前条ノ如ク漸ク十分ニ位ナリ  
故ニ後來其産額ヲ増加スルノ働ニ至ラレハルハ  
又自ラ其仕方アルナリ  
開墾試験場ハ尙人ニテ從事スヘキモノニ非ラス

例令ハ尙反ヲ興ヘラレタル人ハ必ス牛馬杯ヲ養  
フニ及ハス漸ク鶏豚ヲ養テ可ナリ又タ尙町ヲ興  
ヘラレタル人ハ馬ニ頭鶏豚并ニ日本形ノ器械ヲ  
備フヘシ又拾町ヲ有スル人ハ西洋器械ト牛馬各  
四頭ヲ育スル等ノ順序ヲ必ス履踐施行セサルヘ  
カラス

桑茶ノ類ハ必ス畑ノ周圍ニ植テ宜ク畑ノ内ニ植  
ウヘキモノニ非サルナリ

本縣下培養ノ法アレ氏未タ其効ヲ見サレハ右ニ  
説キタル牛馬鶏豚育養ノ順序ニ依ラサルヘカラ  
サルナリ例之ハ現今米ハ三重尙郡ニシテ五万六  
千九百三十拾反ノ地ニ産額七万七千七百五拾八石  
ナリ米スラ猶且ツ二倍ノ産額ニ至ルヘシ況ヤ工

夫ヲ省キ其生質ヲ美ニスル片ハ利用ヲ致ス豈亦  
少々ナランヤ

藥種ノ産額ハ重萬三千百六拾反ノ地ニ六千四百  
九拾八石ナリ是モ前述ノ方法ニ依レハ現今蒔付  
タル所サヘモ猶且ツ産額ヲ増スヘシ右ニ據レハ  
五万六千九百三十拾反ノ産額ハ其幾倍ニ至ルヤ殆  
ント計算シ得ヘカラサルヘシ

滋賀縣

彦根

彦根製糸場一箇年製造高

一生糸凡四千斤

此用繭八百石也

一繅糸釜四拾八臺 但一臺二人掛

一工女人員九拾六人

一製糸三百拾四貫五百三拾五匁 目今マテ横濱送附ノ分

内百六拾九貫百五拾四匁 賣却濟之分

但三井物産會社ニ於テ百斤ニ付洋銀七百弗

一坐繰糸百六拾貫目 目今マテ賣拂高

此代價洋銀六百貳拾弗

一管下一ヶ年成繭三萬石餘

大藏省

内春蚕疋万五千石餘

但八百石餘製糸場へ購入分五百石餘坐採製

糸用

夏蚕疋万五千石餘

但手繰製糸ニシテ縮緬絹縮等ノ織物ヲ製シ

其他西京機織家ノ用ニ供ス

見込彦根製糸場ノ概況ヲ察スルニ製糸ハ較粗ニ

諸般ノ事業ハ微ナリト雖モ其實効ハ却テ富岡ノ

右ニ出ツヘシ而シテ本地ノ旧藩士族ハ六千人餘

現今甚タ衰弊ヲ極メタレハ斯ル工場ヲ幾所ニモ

興シ其困窮ヲ救ハスンハアルヘカラス

江州地方ニ年々産スル蚕繭ノ高三萬石ニ至ルト

雖此之ヲ實視スル片ハ其産スヘキ地ナキカ如シ

且ツ本州ハ湖水ニ瀕ス故ニ低卑ノ地ニテハ永久

桑ノ生育ヲ保ツ能ハス水氣ノ為メニ朽腐マシム

ルノ恐アリ然レモ此地ノ状勢恰モ北伊太利ノ蚕

桑地ニ類似シタリ該地ハ最モ佳良ノ桑樹ヲ産シ

小枝少ク枝幹強壯他ノ及ハサル所ナリ夫レ伊國

ノ桑地ハ北ニモシテ大嶽アリテ霜雪常ニ

絶ヘサルモ能ク斯ノ如キ結果ヲ得ルヲ以テ如何

ゾ本地ノ彼ヨリ劣レルノ理アラシヤ今日目撃ス

ル景況ニ據レハ或ハ其栽培ノ行届カサルカ或ハ

湖水ノ濕浸之ヲ致スニ外ナラス

本州ノ北ニ際シテハ山嶽多ク綿亘シ農事ニ於テ

ハ一切断念スヘキ程ノ處ナリ然レトモ山ノ形質

能ク伊國ニ匹似シタレハ竊モ葡萄莖ニ適應スルナ

ラン宜ク之ヲ栽培ニ注意スヘシ方今實ニ恐ルヘキハ伐木ノ一事ナレド土地ニヨリテ樹木ノ生育セサル處アリ斯ル地面ハ多ク砂礫ヲ含ミ殊更葡萄ニ適スヘシ

地質ノ善良ナルトハ本地ノ紅蘿蔔等ノ色味最美ニ且ツ其肥大ナルヲ以テ知ルヘシ

北江州ハ積雪甚タ多ク山巒地上ハ年中過半ノ不用ヲ生シ諸植ノ生長ヲ妨ク此間殊ニ適應スルハ葡萄栽培ヲ以テ第一トスヘシ

江州ノ人口九七拾万人ニシテ此中農ニ従事スル者他州ニ比スレハ甚タ少シ然レド巨商多クシテ物産ノ運轉遲滯セサルハ又此州ノ幸福ト謂フベシ此巨商輩ハ恰モ英國商賈ノ如ク銳利敏捷至ラ

サルナリ仮令州内物産多カラサルモ貧困無頼ノ人民アルナシ目今獨リ憐ムヘキハ士族ノ産業ナキモノ、ミ且又北方ノ人民ハ實ニ無上ノ地形ヲ占據シ其幸福ヲ保ツニ似タレド畢竟道路ノ便利ヲ有セス自然ノ懶惰習性ヲ致セリ是レ今日ニ於テ取モ慨スヘキノ甚キ者ナリ

### 敦賀

本港ノ位置ハ廻環圍繞シ風波ノ患尠ク實ニ佳良ヲ極メタリト雖モ從來衰微ヲ致シ非常ノ高況ヲ興ナハルハ何ソヤ聞ク往年ヨリ今日マテ北海道ヨリ運輸ノ船舶迂圍曲折三百里ヲ經過シ皆大阪ニ轉スルナリ此ク迂廻シテ大阪ニ到ルハ却テ積荷ノ多クト并ニ便否ノ關係アレハナリ而シテ敦



賀大阪ノ間ハ海路險危船舶常ニ壞損スル甚多ク  
嚮ニ加賀侯カ北海ハ何故令ニ埋了セサルヤト云  
ハレシ程ナリキ實ニ此一言モテ其覆溺ノ船舶許  
多ナルヲ知ルヘシ令ニシテ敦賀ト塩津ノ間ニ  
鐵路ヲ開キ運輸ノ便ヲ通シ諸物直ニ湖水ヲ過テ  
大阪ニ達セシメハ此地ノ繁榮日ヲ期シテ俟ツヘ  
シ倘シ又簡易ニ即効アルトハ「カナル」即チ掘割  
ノ舉ニ如クハナシ到底此二件タル並ニ行フヘシ  
ト虫氏先ツ掘割ヲ急務トス如何トナレハ此舉ヤ  
一ハ運輸ノ至要ヲ便シ一ハ湖水ヲ排泄シ無数ノ  
湖田ヲ起スヘシ故ニ掘割并ニ鐵路ノ便成リテ縱  
横物産ノ輻湊ヲ致シ遂ニハ福井其他ニ迄モ餘勢  
ヲ連及セント掌中ヲ指スト一般ナルヲ得ヘシ

大津ノ商況

大津ハ當縣ノ首府ニシテ而モ京攝ノ咽喉ニ當リ北  
湖水ニ濱シテ近ク敦賀ノ海門ヲ控ヘ我大陸ヲ海ノ  
南北ニ横截セル物貨運輸ノ要衝ヲ占メ東々海中山  
ノ兩道ヲ受ケ東北諸國ノ物貨ヲシテ陸路以テ之ヲ  
京攝ニ致サント欲スルモノハ皆此地ヲ過ザルヲ得  
ザルナリ且ツ夫縣下ノ米ハ悉ク當地ニ幅湊シ米ル  
ヲ以テ當地ノ商業ハ專ラ米ニ是レ籍レルモノト謂  
フモ豈ニ不可ナランヤ是ヲ以テ旧來當地ニアリテ  
富豪ヲ以テ鳴ルモノハ概ネ米商ナリ而シテ其富豪ナ  
ル所以ノ者ハ他ナシ諸藩ノ蔵元ト唱ヘ其公租ヲ抵  
當トシ以テ財政ヲ融通シタルモノナリ然ルニ太政  
維新ニ際スルヤ諸藩ノ廢セララル、ヲ以テ一般ノ商

活ハ大ニ將來ノ方向ヲ失、爾後四五年間ノ高況ハ  
 殆ント衰微ヲ極メタリキ、於是乎該市ノ高況一變テ  
 リ而メ近時高業ヲ擴充スルノ說大ニ世ニ行ハル、  
 ヤ當地ノ如キハ直ニ其影響ヲ受ケ有志者輩出シ或  
 ハ會社ヲ結ビ或ハ銀行ヲ興スアリテ其高業ヲ挽回  
 スルニ思フ勞スルアリ加之目下京撮ニ連絡スル錢  
 路ノ功將ニ竣ラントシ今又北海門ニ接スルノ土功  
 ラ起スアラントスルヲ以テ高沽等大ニ勢ヲ得テ敷  
 賀ノ高沽ト連衡シ南北各地ニ向テ大ニ為スアラン  
 トスルノ考案ヲ發スルニ至レリ當時ノ高況ヲ以テ  
 昔時ノ高況ニ比スレハ大ナル異同アリ之ニ緣リテ  
 之ヲ觀レハ當地ノ高況ハ大ニ他日ニ期スル所アリ  
 而メ本年ノ現況ヲ罔羅シ之ヲ詳述セント欲セハ須

ラク一般ノ統計ヲ示スニ非ラサレハ能ハスト雖氏  
 高法會議所設立ノ日尚ホ淺ク未タ以テ之ヲ統計ヲ  
 求ムルニ術ナシ故ニ今爰ニ高況中ニ就テ著ルキ者  
 二三ノ概計ヲ示シ以テ一斑ヲ窺フ用ニ供セントス

米	
十年 <sup>ヨリ</sup> 越高	本年輸入高
一萬三千百拾七石三斗	三拾零石八斗
計三拾三萬千七百貳拾石八斗	本年輸出高
	二拾九萬六千七百三石五斗
	計三拾貳萬三千〇七拾八石四斗

本表調査スル所ノ石數ハ單ニ大津ニ於テ他國賣出  
 シテ業トスルモノ、手ヲ經シモノ、ミニ係ル而メ  
 其統計ノ比較上輸出入ノ間ニ八千六百四拾四石四  
 斗ノ差アルハ蓋シ市中人民ノ食料中へ費消セルモ  
 ノナリ且ツ此他小高ニ及地賣リヲナシ專ラ市民ノ

需用ニ供スルノ数ハ目下調査ヲナシ得サルヲ以テ  
暫ク之ヲ省クト雖モ其数ヤ又決シテ僅少ノコトニ  
ハアラサルナリ

諸品	東北諸國ヨリ輸入		西南諸國ヨリ輸入		小計
	雜貨	羽鮮肥物	雜貨	羽鮮肥物	
鹽					
合計	九万七千四百五拾三駄		拾万。四千貳百七拾七駄	貳万三千九百七拾七駄	貳拾万。千七百貳拾四駄
			貳万三千九百七拾七駄	貳万四千。五拾六駄	貳万三千九百七拾七駄
				貳万四千。五拾六駄	貳万四千。五拾六駄

本表調査スル所ノ数ハ天津ニ於テ問屋ヲ業トスルモ  
ノ、手ヲ経シモノ、ミニ係ル而ノ其他一般ノ取引上  
出入スルノ数ハ目下之ヲ詳ニセサルヲ以テ之ヲ省ク

而ノ表中羽鮮肥物等ヲ西南諸國ヨリ輸入セルモノハ  
北海ヨリ大阪ヲ経踰セルガ故ナリ

海産輸入		魚問屋一		魚鳥高社一		北海魚會社一		合計	
額價	荷数	不詳	不詳	不詳	貳千三百四拾個	不詳	不詳	不詳	不詳
貳萬九千貳百圓									
三萬五千圓									
三千貳百五拾圓									
六万七千四百五拾圓									

本表調査スル所ノモノハ概ネ之ヲ生魚トス而ノ此  
他塩浸魚及ヒ乾魚等ノ該所ヲ経スレテ輸入スルモ  
ノ頗ル多ク又生魚ト雖モ未タ必スレモ該所ヲ経ル  
ニアラサルカ故ニ天津市中ニ輸入スル物産ノ総價  
額ハ殆ント貳拾万圓ニ下ラスト云フ且ツ其生魚ニ  
係ルモノハ都テ之ヲ攝州及ヒ勢州ノ二國ニ仰クト  
雖モ其路程遠キヲ以テ之ヲ為メニ呂ノ新鮮ナラサ

ルアリテ一般市民ノ大ニ遺憾トスル所ナリキ然ル  
ニ管内ニハ北若越ノ海産ニ富ムアリ而ノ近時琵琶  
湖ニ漁船ノ便アルヲ以テ之ヲ茲ニ需求スルニ至レ  
ハ大ニ其便利ヲ得ヘシト雖氏從來ノ習慣之ヲ天津  
ニ致サ、ルガ故ニ容易ニ其道ヲ開クヘカラス故ニ  
天津魚市等本年ノ初メヨリ若越地方ニ奔走シ其利  
害ヲ説キ初メテ茲ニ連衡シ其産品ヲ天津ニ鬻クノ  
道ヲ開キ之ヲ北海魚會所ニ引請ケ本年十一月ヲ以  
テ開業セリ於是乎天津市中ニ新鮮ノ魚介ヲ絶ッコ  
トナキニ至リ著ルク其便益ヲ市民ニ知ラシメタリ  
開業未タ二閱月ニ過キスト雖氏稍々盛昌ノ兆効ア  
リ今日ノ現景ヲ以テ之ヲ觀ルニ充分ノ成跡ヲ期ス  
ヘキモノ、如ク或ハ攝勢二州ノ魚市ニ多少ノ影響

ヲ生スルアルニ至ルヘシ

養蠶之件

近江國ノ養蚕ハ元來農間ノ一業ニシテ春耕ヲ了シ  
秋收ニ至ルノ間即チ夏蚕養育ニ拮据シ春蚕ニ從事  
スルモノハ僅カニ十中ノ一二ナリシカ曾テ蚕種ニ  
貴重ノ聲價ヲ有セルヲ以テ一時此業ニ從事スルモ  
ノ年一年ニ加ハリ已ニ條例ニヨリテ結合セシ仲間  
人負ハ毎年尙千二三百余ノ多キニ到リ頗ル旺盛ノ  
勢ナリシカ頻年ノ失敗終ニ救フヘカテサルノ極點  
ニ達シタルヲ以テ其業ヲ止メ更ニ夏蚕養育ノ業ニ  
轉セシモノ尠カラス然レモ在來ノ生糸ハ内國用ニ  
ノミ供スル習慣ナルカ故ニ當ニ春夏蚕ノ價ヲ判別  
セサルノミナラズ春蚕ニテハ夏蚕ヨリ利潤ヲ得タ  
ルカ如キノ情況ナキヲ保セサリシカ彦根製糸場創

設以來春蚕ニ非ラサレハ終歲不斷ノ業ニ供スルニ  
足ラス又海外ニ輸スヘカラサルノ理由ヲ實地ニ説  
明シ現ニ買收上ニ於テ三割以上ノ差ヲ顯ハセシヨ  
リ養蚕家ハ稍クニ春蚕ノ貴キヲ瞭知スルニ至レリ  
而ノ原種ノ如キモ單ニ自國産ノモノ、ミヲ信依シ  
未々曾テ他國種ヲ以テ充分ニ試育セシ者アテサリ  
シト雖モ一兩年以來自國種ノ又他國良種ニ如カサ  
ルヲ悟リ試ニ奥州蚕ノ養育ニ従事スル者輩出シ已  
ニ本年共進會ニ出品セシ糸繭ノ内賞典ニ預リシモ  
ノハ彼奥州蚕ニ多カリシヲ以テ益ス養蚕家ノ眠ヲ  
醒スニ至レリ已ニ明年ニ於テハ彦根小濱ノ士族等  
相會同シテ一社ヲ起シ以テ試ニ奥州産ノ蚕種ヲ養  
育スルノ舉アラントス其已ニ縣下ニ於テ此舉アル

ハ嘗ニ癸起者ノ為メニ賀スヘキノミナラス實ニ國  
家ノ為メニ慶スヘキノ事タリ抑モ之カ基ヲ為ス者  
ハ本年ニ於テ神寄郡石馬寺村ニ開キシ傳習所興リ  
テカアリト謂フ可シ今其概況ヲ示ス左ノ如シ  
茲ニ縣下神寄郡宮莊村ノ人野村單五郎ナル者曾テ  
養蚕改良方ニ熱望シ同志二三ト謀リ温暖育ノ養方  
奥州飼トモ云フ試験ノ為メ卵紙ヲ岩代國掛田養蚕  
所ニ購ヒ全所ノ人大橋濟ナルモノヲ聘シ實地研究  
ノ旨出願シタルヲ以テ之ヲ允ルシ而メ若干ノ資金  
ヲ貸與シ全郡石馬寺村ニ於テ假リニ養蚕所ヲ設ケ  
生徒三十拾名ヲ募リ内貳拾名ハ率業セリ本年春  
蚕ヲ飼育スルニ果シテ善良ノ繭ヲ得タリ當時幸ニ  
横濱共進會ノ開設ニ際シタルヲ以テ該繭ヲ出品シ



温暖育ニ係ル費額概表

費目

蚕種費	五〇、八一九〇	雜具費	三一、四八九五
養蚕費	六一四、〇〇二五	營繕費	二〇、七一六八
器械費	三九二、九二六〇	賄費	二一、〇九二五
雜費	二二七、七九二三	給料	二一、二〇〇〇
家賃	二八、五〇〇〇	製糸諸費	九〇、七八八〇

總計 一八八〇、一二六六

養蚕ノ進步如此ナレハ桑葉ノ需用モ亦盛ナラサルヲ得ス於是乎桑樹ノ培養大ニ縣下ニ行ハレ已ニ本年本課ノ手ヲ經テ府縣ニ輸送セシモノハ左ノ如シ

輸出先	株數	代價
石川縣	二百株	六圓
静岡縣	二千株	五拾六圓
廣島縣	壹萬株	三百〇六圓
福岡縣	千四百株	五拾七圓三拾錢
山形縣	二拾株	七拾錢
兵庫縣	三百株	拾壹圓
岡山縣	千株	三拾圓
大分縣	四千株	百貳拾圓
饗庭野拓拓場	二萬株	六百圓
合	合三万九千百貳拾株	合千百六拾九圓三拾錢

而ノ人民ニ於テ他府縣ニ直送セシ内其最モ多數ニシテ本課ノ耳聞ニ觸レタル者ハ凡ソ左ノ如シ但シ



本課ノ耳聞ニ觸レヌメ自ラ輸出セシ者ハ或ハ之レニ幾倍スルモ知ルヘカラスト雖氏暫ラク之ヲ省キ他日ヲ俟テ詳ニスル所アラントス

輸出先	株數	代價
京都府	六千八百三拾株	百六拾三圓九拾錢
長野縣	五千八百五拾株	百四拾貳圓八拾五錢
岐阜縣	貳千株	四拾八圓
高知縣	壹千株	貳拾三圓
和歌山縣	壹千株	貳拾四圓
石川縣	壹千貳百株	貳拾四圓
島根縣	六万零四百株	千九百三拾貳圓六拾錢
	合七万八千貳百八拾株	合貳千三百五拾四圓三拾五錢

彦根製糸場之景况

本場ハ去ル十一年中ノ創設ニ係ル者ニシテ未タ僅ニ一周年度ヲ經シニ過キサレハ充分ノ經驗ヲ詳知スルニ由シナシト雖氏本年ヲ以テ十一年ニ比スレハ又同日ノ比ニアラサルヲ信シ且本場ヲ彦根ニ設立セルモノハ他ナシ素ヨリ産糸ノ改良ヲボムル者ト雖氏其一ハ士族ニ對シテ影響ヲ就産ニ與ントスルノ舉措ナルヲ以テ今之ヲ審ニスルハ決シテ従事ニ非ラサルヘシ雖然前半年度即チ六月以前ハ創業ノ際ニシテ原繭ノ乏シキト器械ノ全ク備ハラサルト且ツ一二兩月ノ業ヲ寒雪ノ為メニ休ミタルトニヨリ今之ヲ叙次スルモ一歳ノ比例ト為スニ足ラサルヲ以テ暫ク之ヲ省キ本年度即チ新繭買收後ノ事

業ニ就テ上報スル左ノ如シ

目次

處事

購繭

付賞繭

製糸

付製造費

出納

工女

目途

處事

原繭ノ買收ハ本場ヲ以テ基礎トシ更ニ縣下近江國

阪田郡長濱及ヒ伊香郡木ノ本ニ出張所ヲ置キ中繭  
上上ヲ大別シテ一等ヨリ三等迄ニ區分シ見本ヲ審  
査鑑定シ以テ其品位ヲ定メ代價ハ現金ヲ以テ即時  
ニ之ヲ拂ヒ而シ出張所毎ニ蒸殺場ヲ設ケ本場ト共  
ニ貯繭ニ從事セリ其購收高及ヒ種類ノ如キハ詳ニ  
第一表ニ掲ケルヲ以テ茲ニ贅セス又新繭ノ繰糸ニ  
從事セシハ六月下旬ヨリシ而シ一月ヲ三週トナシ  
毎週ニ一日ノ休暇ヲ置キ之ヲ一期トナシ十二月廿  
六日ヲ以テ須臾業ヲ脩ム是全ク本年度ニ係ル就業  
ニシテ其日数僅ニ八週回ニ過キナルナリ而シ事務  
ノ掌管ハ勸業課長高谷ニ等屬其場長ヲ兼任シ中居  
八等屬森十等屬ノ西人之ニ在勤シ原繭及ヒ金銀ノ  
出納ヨリ工女取締ノ事ニ至ルマテヲ擔任セシメ其他

雇員若干ヲシテ雜事ヲ掌理セシメタリ

購繭附費繭

本年ノ購繭及ヒ買收代價ハ第一表ノ如シ又新繭以來十八週間ノ費繭ハ第二表ノ如シ

第一表

十二年度原繭購入表

種 類	購 繭	代 金 額	石 當	代 金	摘 要			
本 場	自國種春蚕	一五五	六七一	三九〇	〇五二	二五	〇〇〇	十石八斗ハ白繭ヲリ蓋シ碧俗青ノ多量ヲ有スレハナリ
長濱出張所	全	四〇五七	四四六	一〇六〇	五六〇	二六	四八〇	〇買收繭總額ノ内三百五十八石一併スレハ長石即チ十貫目ノ平均代價原價トシテハ之買收ヲ運搬スニ保
木本出張所	全	一六二二	四九〇	四一六	〇六八	二五	三七一	七目ハ即チ七百九十八石二斗五外九合
阪田郡中野村	全	二三	九五〇	七九	〇三五	三三	〇〇	生繭ハ長石ニ内外スルヲ以テ本表
神等郡石馬寺村	全	一四一	〇〇〇	五一八	四〇〇	三六	七七〇	賣買ノ習慣斗量ヲ以テキヤクマンノ秤
浅井郡大井村	全	一五二	八六〇	四三六	〇〇〇	二八	〇〇〇	

第二表

全 川 道 村	全	八二	三〇〇	三一三	〇〇〇	二五	九三〇	量ヲ以テ又四己十貫目ノ
夫上郡房根	全	一八	五〇〇	四七	八一七	二五	八〇七	七千九百八十二貫五百八十
浅井郡弓削邑	全	八七	九〇〇	二一一	五七二	二四	〇六九	タリ。本表ノ繭代價ハ真ノ
蒲生郡西大路邑	全	二八〇	〇七〇	五五五	七九〇	二一	二四二	存保ル諸費七百四十三拾錢厚
合 計	全	七九八二	五八七	二一五	〇九八	二六	四九六	二十七四三十七錢四厘三當ヒリ

月々	製糸用		精算用		計		摘要	
	製糸	用	精算	用	計	計		
七月	八六	二五五	一	九七五	二〇〇	九五	四七	定額者ハ 精算額 及、 量衡ノ差ヲ 豫 算シテ 精算額 額ハ 計七 百六 十四 石六 斗三 升五 合一 日 七 日 八 日 九 日 十 日 十一 日 十二 日 十三 日 十四 日 十五 日 十六 日 十七 日 十八 日 十九 日 二十 日 二十一 日 二十二 日 二十三 日 二十四 日 二十五 日 二十六 日 二十七 日 二十八 日 二十九 日 三十 日
八月	五五	七二〇	一	二八〇	九〇〇	七一	九〇〇	
九月	五〇	五五〇	三〇	八二〇	八三〇	九一	二〇〇	
十月	五六	三〇〇	一五	〇五〇		七二	三九〇	
十一月	五八	二八〇	九	〇五〇	五〇〇	七一	二三〇	
十二月	六六	〇〇〇	六	〇六〇	九〇〇	七六	三六〇	
費額總計	三七七	一〇五	七五	〇三五	三七〇	〇七七	五五〇	
現額	---	---	---	---	---	二八七	〇八五	
合計	---	---	---	---	---	七六〇	六三五	

製糸附製造費

本年前半度(六月ヨリ十二月マデ)ノ製糸ハ二百九拾五貫二百拾  
 五匁此和斤千八百四拾五斤余ニシテ内千五百八拾  
 六斤ハ組育及ヒ横濱ニ輸シ現ニ本場ニ存スル(即チ  
 越高)モノハ二百五拾九斤タリ而メ其月々ノ製造高  
 ハ第三表ノ如シ又其製造費ハ第四表ノ如シ

第三表

月々製糸出来高表

月	製糸高		糸平均分		生皮字		海外機械運出		摘要
	製糸	高	糸平均分	生皮字	海外機械運出	摘要			
七月	七一	五三	九分	二七	一七八			計 算 便 日	
八月	四八	二〇二	八分七リ	一九	三九〇				
九月	四二	五八	七分八リ	一六	二二二				
十月	四四	一七七	八分三リ	二〇	三〇八	九八	四三一		

十一月	四七	〇二〇	八分	一七	一〇〇	六三	四三九	七十九
十二月	四九	一〇二	八分一リ	一七	〇八五	九一	八九〇	八
計	二九五	二一五		一一三	五五二	二五三	七六〇	
輸出差引残						〇一〇	〇五五	

第四表

製造費月々調査表

	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	計	摘要
工男給料	五七 四	〇〇〇 四	五七 四	五六 四	〇三 五	五〇〇 五	五六一 一	運送費ハ此表外ニ要ス 十六回六十銭ニ當リ然レモ 除セ八百斤ノ製造費ハ 半年度ノ製糸高千八百 此全計二千七百五回廿五銭ニ
工女給料	二七三	一七七	二五三	二六〇	二七	二九八	一〇五	
薪炭費				一一三	〇五〇	六五	一〇三	
役員日當	一六	九五〇	一一	五〇〇	三	一〇〇	六一	
雜費				二六	八二〇	五二	一一八	
計	五七四	〇〇〇	五七四	五〇三	五六一	六一一	五三三	

月計	〇八七	三〇二	三九〇	四〇三	〇〇二	三五〇	〇七〇	六九〇	〇三〇	一三〇	五二〇	〇二九	
全計													十五斤ノ荷造リトス 二斤ニ

出納

原繭買収ニ係ル借入金共ニ六ヶ月間ノ諸入費ヲ併  
ヤシ出納即チ十二月三十一日ノ貸借ハ第五表ノ如シ

第五表

十二月三十一日實際出納表

借方		貸方		摘要	
定期借入金	二九一 一七	三六八	原繭代	二八五	〇三〇
宗代金	一八五 七	八五〇	前年度繰替金	五六八	三一
銀行其他當坐借入金	三八 九	一〇五	製造費	二七〇 五	三一
工女積立金額	五九 三	二〇九	屑物全上	三九〇	三三
臨時收入	九六	八六 七	修繕費	八七	六六 九

却テト  
ト  
支辨  
シタ  
ハ  
茲ニ  
本  
年  
一  
月  
公  
積  
ヲ  
建  
築  
ス

出荷費	六〇	五七六	六	買取	九
物品買得	九六	八九四	四	實費	九
臨時費	二〇六	一五五	五	貸入	五
銀行其他當生債	二七三	九〇	四	借入	五
利金	二九五	一三九	四	當入	五
有金銀	三三七	八六七	六	借入	五
計	三二〇五三	三九九九	六	借入	五
計	三二〇五三	三九九九	六	借入	五

工女

工女ハ之ヲ七等ニ分チ月給ハ四田五拾錢ニ起リテ  
 高田貳拾五錢ニ止レリ而テ其工女タル者ハ勉メテ  
 士族ヨリ採雇セリ蓋シ士族ノ就産ヲ主トスルニヨ  
 レハナリ是ヲ以テ偶々場内ニ寄宿セル者アリト雖  
 氏多クハ通セノモノニシテ場外ノ取締ハ之ヲ父兄

ニ托セリ其現負ハ第六表ノ如シ而シメ又給額三分  
 ノ一ヲ貯金トナシ之ヲ本場ニ預リ而シ半歳毎ニ月  
 六朱ヲ利ヲ付シ更ニ之ヲ銀行ニ預クルノ場規ヲ立  
 テタリ然レモ本人ニ於テ強テ貯金ヲ望マサレハ本  
 場亦タ之ヲ強ヒザルナリ乃チ十二月三十一日預金  
 額ハ第七表ノ如シ

第六表

十二年十二月工女現負表

前月	四人	検査	一等准等	二	二等准等	三	三等准等	四	四等准等	五	五等准等	六	六等准等	七	七等准等	總計
昇級					六	八	五	六	十	七	八	九	八	七	八	百貳拾陸人
降級					一	八	三	四	一	八	六	二	六	八	五	四拾四人
新雇																三人

歳首

免雇  
現差引

一

一

二

百貳拾人

### 第七表

### 工女貯蓄金精算表

年 改元 二月	元	金	利	金	摘要
十月	二五四	三八五	一八	三一六	都 合 ニ ヨ リ 本 場 ニ 預 リ 置 キ テ リ
三月	一六	七七三		九〇六	此 預 金 ハ 第 百 三 拾 三 銀 行 ニ 定 メ テ 預 リ 置 キ テ リ
四月	三七	〇三四	一	七七八	月 々 ノ 預 金 ヲ 差 引 セ テ 高 ク 登 記 ス
五月	四二	二六六	一	七七五	高 ク 預 金 ヲ 差 引 セ テ 多 ク 差 下 リ
六月	三八	〇一六	一	三六九	
七月	三四	二六〇	一	〇二八	
八月	二〇	三五九		四八九	

九 月	五 〇	一 三 〇	九 〇 二	期 類 ノ 由 リ
十月	三八	九二〇	四六七	モ ハ 退 場 ノ 由 リ
十一月	五七	七一八	三四六	場 人 ノ 由 リ
十二月	五七	五七一		
計	六四七	四三二	三十七	
總計			八〇八	

### 目途

本場ノ創設ハ士族ノ授産ニ基ツクト雖氏在來吾近  
 江國ニテ口碑ニ傳フル所ノ産繭三萬石及々長濱ニ  
 千五百個ノ生糸ヲシテ單ニ内地用ノミニ止マラス  
 其一班ヲ海外ヘ輸サントスルノ精神ニ是レ據レリ  
 而ノ輓近大ニ勸奨スル所ノ坐繰糸ノ如キモ茲ニ統  
 轄シ以テ將來一ノ民立會社即チ輸出糸改會所トナ

シ信依ヲ海外ニ博スル所アラントス而メ本場ニテ  
毎歳費ス處ノ九百石ノ原繭ハ必ス彦根所住ノ士族  
ニテ養成セシメンコトヲ勸奨シテ止マサリシカ而  
三年以來該士族ノ養蚕ニ黽勉スル年一年ヨリ加フ  
ルモノアレハ此効ヲ奏スルノ日モ蓋シ遠キニ非ラ  
サルヲ信スルナリ

坐繰糸傳習所

明治十一年縣下犬上郡彦根ニ於テ産糸改良ト士族  
ノ就業トヲ主トシ一ノ製糸場ヲ設ケシト雖モ唯リ  
此一場ノ創設ヲ以テ足レリト為スヘキモノニ非ス  
故ニ坐繰器械ヲ以テ一家ノ産業ヲ興シ施ヒテ各地  
ニ及ボサンコトヲ希圖シ併セテ該地ニ坐繰傳習所  
ヲ設ケ工女五十名ヲ召募シ以テ之ヲ教ヘ幾クナラ  
スレテ工女皆其業ヲ卒フ當時 聖上ノ御巡幸ニ際シ  
大隈参議ノ御代覽ヲ辱シ親ク其方法ヲ實視セラレ  
タルノ時ニ當リ坐繰糸普及ノ方法ヲ上陳セシニ公  
深ク之ヲ嘉ミセラル之ニ由リテ該起業ニ関ル資金  
貸與ノ為メ凡ソ四萬五千圓ノ豫算ヲ以テ年賦拜借  
ヲ内務省ニ出願セシハ實ニ本年一月ナリキ而メ縣



會開設ニ際スルヤ議員ニ向テ該舉ノ可否ヲ問ヒ且  
ツ地方税ヲ以テ縣下ニ三ヶ所ノ傳習所ヲ開カンコ  
トヲ諮リレカ議員等大ニ此舉ヲ賛成スルノミナラ  
ス之ヲ三倍シテ九ヶ所ノ創設トナシ資金千九百七  
拾余円ヲ支出スルニ決シタリ然ルニ蚕時已ニ迫リ  
勢ヒ逡巡スヘカラサルヲ以テ其始終ヲ具申シ不取  
敢拜借金額四万五千円ノ分ヲ三井物産會社ニ依リ  
海外為替ノ方法ヲ以テ借りハレノ定約ヲナシタリ  
キ是ニ於テ乎漸ク本課<sup>勸業</sup>ノ宿望ヲ達スルヲ得タ  
リ而シテ其傳習ヲ授ケシト其資金ヲ貸給セシ方法  
ハ左ノ如シ

坐繰傳習規則

第一條

一 此傳習ハ一二ノ有志者又ハ一町村ノ申合セ或ハ一團  
ノ會社及ヒ仲間ノ論ナク少ナクモ三十人以上ノ工女  
ヲ集合シ且之ニ應當ナル原繭ヲ貯有スルノ地ヨリ始  
ムヘシ

第二條

一 傳習ハ三十日ヨリ多カラサル日数ヲ定メ師婦其他ノ  
工男女及ヒ該業ニ必用ナル一切ノ器械ハ總テ本課ヨ  
リ貸給スヘシ且此傳習ハ其發起ノ町村ニ就テ開設ス  
ヘシ

第三條

一 傳習ハ單ニ工女ノミニ止ラス檢糸及ヒ裝束ノ方法ヨ  
リ原繭貯蔵ノ下ニ至ルマテ總テ附帶セシムヘシ而シ  
テ檢器及ヒ蒸殺器ノ類モ總テ前條ノ通りタルヘシ

第四條

一傳習ニ費用セル原繭及ヒ傳習ニ要スル諸雜費ハ悉皆勸業費ヲ以テ交附スヘク且傳習中ト雖ヒ工女ノ巧拙ニヨリ多少ノ挽賃ヲ給付スヘシ

第五條

一本業ハ資繭ノ貯蔵ヲ以當初ノ必務ト為スニヨリ該代金ノ拜借ヲ仰クモノハ始末ヲ審理シ凡ソ拾石ニ付金貳百圓ノ割合ヲ以貸與スヘシ

但此貸給ハ一町村及ヒ一社人ニ付金四千圓ヨリ多カラサルヘシ

第六條

一前條ノ貸給金ハ他ニ販賣セル糸代金ノ内ヲ以テ上納セシムヘシ

但利足ハ年五朱ノ割ニシテ抵當証ハ諸種ノ公債証書ニ限ルヘシ

第七條

一製糸ハ當分彦根製糸場ニテ統一シ海外ノ販路ヲ媒介スヘシ因テ製造人ハ原價及ヒ賣價(所謂差直)ヲ附シ順次ニ該場ヘ委送スヘシ

但特立シテ販賣スヘキカアル者ハ此限ニ非サルヘシ

第八條

一製糸場ニテハ本糸ノ品位ヲ審別シ信依ヲ海外ニ保スルニ止リ輸出百般ノ事ハ三井物産會社ヘ委付スヘシ然レモ其相場ノ昇降ニヨリ或ハ臨機ニ放賣ヲナスコトアルヘシ

第九條

一製糸場ニテハ製造人ニ對シ各所ノ相場ヲ時々ニ報スルハ勿論輸出先ノ景況及ヒ賣買仕切ノ通信等ハ一々ニ明示シ且報道ヲ怠ラサルヘシ

第十條

一傳習中使用セル一切ノ器械ハ原價ヲ以該傳習人ニ拂下クヘシ而シテ該代價ハ本糸買上代ノ内ヲ以漸次ニ還收スヘシ

於是乎有志者相會シ以テ三十人ノ工女ヲ募リ傳習ヲ願出テシハ彦根并ニ小濱ノ士族ヲ始トシ陸續出願セリ是ヲ以テ更ニ傳習所ヲ設ケタル地ハ阪田郡ニアリテ長濱清瀧淺井郡ニアリテ曾根川道伊香郡ニアリテ川合之ニ彦根小濱ヲ加ヘテ八ヶ所ノ傳習

所トナレリ而シテ其技ノ優劣ヲ甄別シ卒業狀ヲ與ヘタルハ第一表ノ如ク又之カ為メニ要セシ費用ハ

第二表ノ如シ

第一表

明治十二年坐繰傳習人負及ヒ等級一覽表

地名	等級	一等	二等	三等	四等	五等	六等	七等	等外	總計
近江國淺井郡					十九人	八人	四人			三十一人
若狹國遠敷郡						五人	五人	十二人	十七人	三十八人
小濱										
近江國坂田郡		一人	二人	五人	十一人	九人	三人	一人	三十二人	
長濱										
同國伊香郡										
川合		四人	一人	四人	六人		三人	一人	十九人	
同國坂田郡										
清瀧						三人	三人	十一人	七人	二十四人
同國淺井郡				三人	四人					
曾根						三人	八人	四人	一人	二十三人
同國犬上郡						一人	四人	廿六人	八人	三十九人

長濱町 同簿 計			二人	二人	五人	七人	三人	一人	二十人
計	五人	八人	廿四人	四十二人	四十人	六十一人	三十六人	二百二十六人	

第二表

地 名	発起人名	器械新調及雜費	教員及工男給其他	器械運搬費	通 計
伊香郡川合村	本村彦四郎	五五, 〇九八	五九, 九三〇		一一五, 〇二八
浅井郡曾根村	大橋半右衛門	一一六, 八一七	五一, 一三五		一六七, 八六五
全上 川道村	中川甚右衛門	一六二, 〇七四	五一, 四〇三		一九七, 二二〇
坂田郡長濱村	浅 見 又 藏	九六, 九八〇	五六, 三三四		一五八, 四〇八
全上 清淺村	西村五郎作	一〇〇, 〇〇〇	五一, 三三五		一四八, 三三五
全上長濱公司 傳 習 所	浅 見 又 藏	一〇〇, 〇〇〇	三九, 二〇〇		一四八, 三一二
全上郡尾根	野 志 外 次	一三七, 五二六	三九, 五五二		一七七, 〇七八
遠敷郡小濱	小澤彌平次	九三, 三五八	八八, 二三〇		一八一, 五八八

本課仕掛金		五八一, 一一〇	三七, 三〇〇	一三, 八八八	六三二, 二九八
總 計	八	一四八, 八八九	四七四, 四一九	一三, 八八八	一九七, 〇〇〇

如斯其業ヲ授ケ而メ各発起人ノ營業ヲ繼續セシメ  
 シカ為メ其貯鹽(貯鹽ハ即チ蒸殺セシモノニシテ其  
 蒸殺器ヲモ賃與シ併セテ其方法ヲ授ケタリ)ノ多少  
 ニ應シ規則ニ準シ賃與セシ金額及ヒ爾来ノ製造高  
 ハ第三表ノ如シ

第三表

地 名	発起人名	工女人数	製糸高	横濱輸出
伊香郡川合邑	本村彦四郎 外五名	一九	二二, 四四九	二二, 四四九
浅井郡曾根村	大橋半右衛門 外三名	二三	九, 一四四	七, 一四四
全上 川道村	中川甚右衛門 外三名	三	一四, 三〇〇	一四, 三〇〇

浅井郡大濱村	松本 幹 外一名	100	未定	2,866	3,866
阪田郡長濱町	浅見 又蔵 外三名	400	3	2,588	2,588
全上 清滝村	西村 五郎作 外一名	100	14	1,361	1,361
犬上郡彦根	岡野 志 外三名	250	39	4,401	1,978
全上	高橋 建五郎 外一名	500	10	2,618	2,618
遠敷郡小濱	小沢 弥平次 外十二名	1750	38	3,106	
総計	丸	1790	111	14,610	10,945

而シテ其製糸ヲノ横濱共進會ニ出品シ其品評ノ審  
 査ヲ乞フニ從來ノ手採糸ニ比セハ幾層カ優ルハ  
 勿論其賞ニ與リシ者已ニ三名ノ多キニ居レリ然レ  
 氏事素ト創始ニ属スルヲ以テ各場共ニ經驗ニ乏シ  
 ケシテ充分ニ其結果ヲ見ル能ハサルト且ツ製糸高  
 ノ未タ多額ヲラサルハ抑モ又遺憾ト謂フヘシ

長濱縮緬輸出之件

近江國阪田郡長濱地方ニ於テ織ル所ノ縮緬ハ濱縮  
 緬ト称シ縣下著名ノ物産タリ曩日高務局派出官ノ  
 巡回ニ際スルヤ説クニ該品ヲ以テ海外ニ試賣スル  
 ノコトヲ以テス是レ本課ノ夙ニ望ム所ナルヲ以テ  
 直ニ該職專業者長濱町浅見又蔵全郡室村茶田源七  
 ノ両名ヲ勸奨シ縮緬二十匹絹縮十匹（幅曲尺二尺  
 二寸長ケ七丈）ヲ織ラシメ高務局ノ紹介ヲ以テ起  
 立工業會社ニ托シ試ニ米國紐育府ニ輸出シ之ヲ賣  
 リタリシカ彼我原價ノ釣合ニシテ左表ノ如ク非常  
 ノ利益ヲ得ルニ至レリ蓋シ本年ノ事タル創始ニシ  
 テ豫メ前途ノ如何ヲ期シ難シト雖氏將來尚ホ其價  
 ヲ廉ニシ其品ヲ組織スルニ一層ノ注意ヲ成レ以テ

海外ニ輸出スルアラハ必ス其利ヲ得ルニ至ラン已  
ニ浅見又蔵ノ如キハ此ニ注目スルアリテ新ニ起立  
工商會社ト契約ヲ結ビ既ニ實地ニ輸出セリ之ニ縁  
リテ之ヲ觀レハ海外輸出ノ一品ト為ルヤ期シテ待  
ツ可キク如シ

試賣精算書

一 濱縮緬

貳拾匹

此原價金四百八円

一 絹縮

拾匹

此原價金百七拾円

小以金五百七拾八円

此賣價千四百三円八錢七厘

内金五百七拾四九拾七錢三厘

輸出ニ係ル諸費

差引

金八百三拾貳円拾七錢四厘

内

金五百七拾八円

縮緬ニ拾匹  
原價引去

絹縮拾匹

利益

金貳百九拾四円拾七錢四厘

敦賀之商况

敦賀ノ地タル前ニ至良ノ海灣ヲ擁シ尚北ノ諸道ニ  
航路ヲ通シ後ニ琵琶ノ大湖ヲ控ヘ水運ニ依リ大津  
ヲ經テ遠ク南海諸道ニ連リ商業上ニアリテ最モ緊  
要ナル運輸ノ利ヲ得タル所ナリ是ヲ以テ今ヲ距ル  
二百年前我國未タ航海ノ利聞ケサルヤ米ニ肥料ニ  
其他百般ノ物貨悉ク此港ニ輻湊セリ故ニ米價ノ如  
キハ直ニ其影響ヲ京津ニ與ヘ而メ北越諸津ノ相場  
ハ多ク該港ノ景况如何ニ由リテ其高低ヲ異ニセリ  
當時此海門ノ繁盛ナル唯リ口碑ニ存シ野乘ニ徴ス  
ルノミナラス今尚ホ現然トシテ當時諸藩ノ廩趾及  
ヒ用達等ノ称呼ヲ存在セリ（弘安ノ役兵ヲ此地ニ  
屯シ其入船ヲ禁セシカハ京師三月ノ飢饉ヲ致シタ

リト云フ當時ノ景況以テ微ス可シ然ルニ一タヒ  
石州洋ノ航路開クルヤ北地ノ米穀ハ渾テ遠ク長州  
馬関ヲ廻リ大坂ニ運漕スルノコト、ナリ於是乎該  
港ノ高況頓ニ衰ヒ今ヲ距ル數年前其極点ニ達シタ  
リキ此時ニ當リテ有志者深ク之ヲ憂ヘ挽回ノ策ヲ  
企テント欲スルモ如何メン此衰微ヲ來スモノハ其  
基アリテ容易ニ之ヲ挽回スル能ハス其基トハ即チ  
敦賀ヨリ湖邊塩津ニ達スル路ニシテ其路程ハ僅ニ  
五里ニ過キサルモ其間ニ深坂峠ト稱スル羊腸數町  
ノ峻峻ナル阪アリテ車運送ノ用ヲ為サス物貨ノ運  
送ハ人自ラ之ヲ負擔スルカ或ハ馬力ニ賴ラサレハ  
能ハス故ニ其運賃常ニ貴ク随テ其影響自ラ高業者  
ニ及フアリテ多少ノ衰弊ヲ來シタリ而シテ此峻阪ノ

開鑿ニ着手セント企ツルモノアリト雖氏該道ハ素  
ト大小數藩ノ領地ニ渉ルヲ以テ其間ニ多クノ論ヲ  
生シ容易ニ之ヲ開クコトヲ得ス置縣ノ後ト雖氏縣  
治ヲ殊ニセルヲ以テ又速ニ之ニ着手スル能ハス明  
治九年ノ秋敦賀縣ヲ廢シ更ニ本縣ニ併セラル、ヤ  
始メテ連絡ノ通スルヲ得タルヲ以テ直ニ峻阪ノ開  
鑿ニ着手セシカ幸ニ該港ノ富豪者亦タ相謀リ金壹  
万圓ヲ献納シ以テ開鑿費ノ幾分ニ充テンコトヲ出  
願セリ是ヲ以テ本縣大ニ土功ヲ起シ十一年ニ於テ  
其間道ナル新道野越開鑿ノ功ヲ竣ユ先是運賃ノ最  
高点ニ達シタルハ一駄ニシテ金四拾五錢ヲ要セシ  
カ此間道竣功スルニ及ンデヤ民負擔ノ業ヲ止メ馬  
ヲ他ニ賣リ而シテ更ニ車七百輛ヲ製シ能ク運輸ノ便



ヲ通スルヲ以テ其運賃同量ニシテ金拾五銭内外ニ  
下レリ於是乎該港高業者、困難稍ク之ヲ救フヲ得  
タリ加之本年政府ニ於テ將ニ該港ヨリ米原ニ造ル  
ノ錢道起功<sup>ヲ</sup>舉アラントス此舉又其功ヲ竣ルアラ  
ハ該港ノ商業益ス繁盛ニ至ルハ衆ノ共ニ疑ハサル  
所ニノ既ニ本年大津米商會所ト連絡ヲ通シ北國米  
ヲ此地ニ集メ盛ンニ其高業ヲ營ミ供セテ荷為換ノ  
業ヲ創メントスルアリ然ラハ則明年ノ實況ヲ報ス  
ルヤ一層見ルヘキモノアルヲ信スルナリ該港ノ高  
況ハ前途尚ホ期スヘキモノアリ故ニ本年ハ該港ノ  
沿革ヲ畧叙シ以テ高況ノ報告ニ換フ是レ他日ノ參  
考ニ供セント欲スレハナリ

### 製茶之件

縣下夙ニ製茶ヲ以テ其名ヲ海内ニ博シ其産亦タ百  
万斤ノ多キアリ而シテ縣下ニアリテ其品ノ最モ精良  
ニ其産額ノ最モ多キハ甲賀郡ニアリテハ信樂谷ノ  
各村共ニ土山前野ノ西村愛知郡ニアリテハ政所村  
滋賀郡ニアリテハ坂本以南ノ諸村粟田郡ニアリテ  
ハ勢田川ノ下流ニ位スル村々神寄郡ニアリテハ山  
上村タリ開港以降製茶ノ海外ニ輸出スルマ民皆裁  
培ニカヲ尽クシ製茶日ニ盛ンニ行ハレ産出ノ額日  
ニ増セシカ奈セン近年其價頓ニ下リ為メニ損耗ヲ  
受クルモノ尠カラズ是ヲ以テ數年ノ勞一日ニシテ  
之ヲ失ヒ將ニ茶園ヲシテ荒蕪ニ屬セシメントスル  
ニ至レルコトアリシカ輒近三井組ハ紅茶製造場ヲ

滋賀郡大津甲賀郡水口土山ノ両村ニ開キテ盛ニ紅  
茶ヲ製造セシク十一年ニ至リ之ニ加フルニ土山ノ  
製茶家數名東京府人平岡濤一ナルモノト更ニ又紅  
茶試験場ヲ土山ニ開キ盛ニ紅茶ヲ製造シ以テ製茶  
ノ衰運ヲ挽回スルニ熟望シタリ今年一月内務省ノ  
紅茶傳習規則ヲ海内ニ布カレ静岡縣下ニ於テ勸農  
局出張傳習所ヲ開キ各府縣ノ有志者ヲ召募セラル  
、ヤ縣下ノ人民ニシテ其募ニ應セシ者四名アリ其  
内卒業ノ者三名尋テ勸農局ニ於テハ本年五月十五  
日ヲ以テ紅茶傳習所ヲ縣下土山ニ開カレ接近ノ二  
府九縣ノ有志者ヲ召募セラレタリ於是乎縣下ノ人  
民ニシテ其募ニ應スル者四十二名内事アリテ半途  
ニシテ止ムモノ十九名ヲ除ケハ悉ク皆卒業セリ而

メ勸農局ハ九月二十日其場ヲ開テタリ紅茶傳習所  
ニ於テ生葉買收ノ高ハ尙萬三千貳百四拾貫目余而  
ノ其輸出額ハ貳万三千三百磅ナリ而ノ又本年ニ於  
テ民ノ紅茶製ヲ營ミシ者甲賀郡ニアリテハ土山ニ  
一ヶ所五反田ニ一ヶ所大原上田村ニ一ヶ所牛飼村  
ニ一ヶ所神寄郡ニアリテハ八日市村ニ一ヶ所ナリ  
而メ尋常ノ製茶ハ幸ニシテ本年ハ其價高貴ノ極点  
ニ至レルヲ以テ前日ノ衰頽ヲ挽回スルヲ得タリト  
雖モ一利アレハ一害アルハ世ノ常ニシテ惜哉二番  
芽ヲ摘ムノ時ヤ茶園往々虫害ヲ受クル者アリ而メ  
又本年ハ民其浮利ヲ占メント欲シ卒年ハ二回ノ外  
摘ミ取ラサリシモ幾回トナク之ヲ摘ミ取リテ日乾  
製（方言青製ハ金ニテ熬テ日ニ乾カシ仕上ケタルモノ）ヲ造リテ宇治製ニ混和シ時

價ニ應スルノ弊ヲ生シタリ本課深ク之ヲ憂ヒ以テ  
之ヲ防クノ方法ニ注意シタリキ知ラス明年何等ノ  
影響ヲ來タスヘキヲ

肥料輸入之件

當縣下農圃ノ肥料タルヤ白子鮓ナリ而ノ其品ハ之  
ヲ北海ニ仰カサルヲ得ス是ヲ以テ毎年其費消スル  
所ノ者ハ殆ント十數万石ニ登ルト云ヘリ而ノ縣下  
豪高者ノ古來北海ニ廣大ナル漁場ヲ有シ支店ヲ設  
ケ該業ヲ営ムモノ多シト雖ヒ悉ク之ヲ縣下ニ輸ス  
ルニアラサルヲ以テ未ダ一般農圃ノ便利ヲ來スニ  
及ハサリキ今ヤ一般ノ農業大ニ進ミ隨テ肥料ヲ要  
スルコト亦タ太タ多キハ論ヲ待タスト雖ヒ近來肥  
料ノ價大ニ貴ク米價常ニ賤シ(本年ノ如キハ然ラ  
サレ氏)是レ一般ノ農圃大ニ憂フ所ニシテ縣廳モ  
亦タ其憂ヲ憂ヒ嘗テ營救セシコトアリ偶去明治十  
一年ノ末ニ至リ縣下甲賀郡山村九郎次及ヒ大津阪

本町小西業廣ノ西入アリテ大ニ此憂ヲ同フニ開拓  
使ノ税品ヲ引受ケ低價ヲ以テ之ヲ管内ノ農圃ニ賣  
リ以テ農業ノ便利ヲ計ラント遂ニ之ヲ縣廳ニ願出  
テタリ於是乎縣廳亦々其篤志ヲ嘉ミシ速ニ開拓使  
ニ協議ヲ遂ケ充分ノ事業ヲ興サシメントセシト雖  
氏本年ハ税品ニ餘贏ナク漸ク西入ニシテ尙万石余  
ヲ引請クルヲ得テ之ヲ三菱汽船會社ノ九重丸ニ積  
ミ以テ縣下敷賀港ニ輸送セリ而シテ現時之ヲ管内ニ  
賣捌キ未タ其結果ヲ見ル能ハスト雖氏其農圃ニ利  
アルハ論ヲ待タサルヲ以テ更ニ明年ヲ待テ益ス其  
業ヲ擴充センコトヲ企圖セリ

